

① 樋口一葉ゆかりの地コース

一葉が生きた証を感じながら歩いてみませんか

- おもな見どころ：一葉桜木の宿跡・法真寺、一葉菊坂旧居辺、旧伊勢屋質店、一葉終焉の地、右京山
- 約2時間30分／3km
- スタート：丸の内線本郷三丁目駅
- ゴール：丸の内線・南北線後樂園駅または都営三田線春日駅

本郷界隈には一葉がかつて暮らし歩いていた所があるので

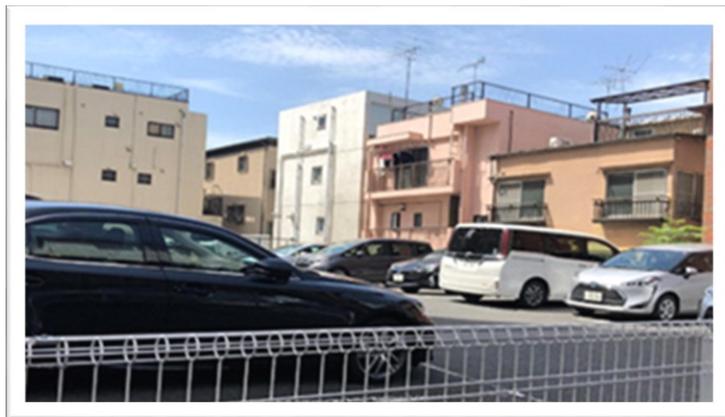
1. 子供の頃過ごした地～生涯で最も裕福な暮らしでした
2. 小説発祥の地～戸主として貧しい生活をしながら文学をめざしました
3. 通ったお店～引っ越しをくり返す中で通った店です
4. 終焉の地～小説がやっと認められました

1. 一葉が子供の頃暮らした家（桜木の宿）があった場所はどこ？



法真寺（本郷5-26-4）真言宗。和順山歓喜院法真寺、慶長元年(1596)知恩院より寺号付与、開山年不肖。天保10(1839)年4月29日に上棟した本堂が今も残る。2015年改修。ご本尊の阿弥陀如来(座像)が安置されている。一葉忌の法要が毎年命日の11月23日に行われている。

答えはここ👉 [法真寺のお隣です](#)



一葉さんも見ていた、明治の頃と変わらないはずの令和の空

それを見あげる法真寺の愛らしい
アミちゃんとダブちゃん



腰衣観音様

両親、姉、2人の兄、妹の5人で暮らしていた家があったところです。4歳から9歳まで金銭的に豊かな幼少時代を過ごしました。

まだ幼い一葉さんが、家の二階の窓からお隣の法真寺の観音様を眺めていました。

観音様は、後に小説『ゆく雲』にも描かれます。

2・ 旧居跡 文学発祥の地

旧居跡(本郷 4-32、31)(本郷菊坂 69/70 番地)付近



本郷通りから見た菊坂



菊坂下道



樋口一葉：文京区HP
文京ゆかりの文人 より

17歳の時に、大借金を残して父親が亡くなります。その後、戸主として針仕事や洗い張りなどで生計をたてながら、文京区の安藤坂にある中島歌子が主宰する歌塾「萩の舎」にひき続き通います。

女性3人暮らしのこの地で初の小説が生まれました。当時使っていた井戸(形は違いますが)は今も在ります。ただしこの井戸への小道は私有地のため、入ることができません。

3・ 菊坂界隈の通った店



旧伊勢屋質店 (本郷 5-9-4)



菊坂

(写真：文京観光ガイドマップより)

木造二階建て、万延元年(1860年)創業、店は昭和57(1982)年廃業。

土蔵は明治20年頃足立区鹿浜から移築。今も現存。

伊勢屋のことをよんだ一句です。↓

歳のうちにはるかへ行く 衣替え

明治26年5月2日 蓬生日記

一葉さんはこの質屋さんに
何度も通ったものでした

その他、もしかしたら一葉さんが訪れたことがあったかもしれない・・・菊坂界隈の店（あくまでも筆者の想像です）



『金魚坂』

江戸時代から続く金魚店



『石井入り豆店』

明治20年創業煎り豆店



『炙ちごや』

明治10年創業和菓子店

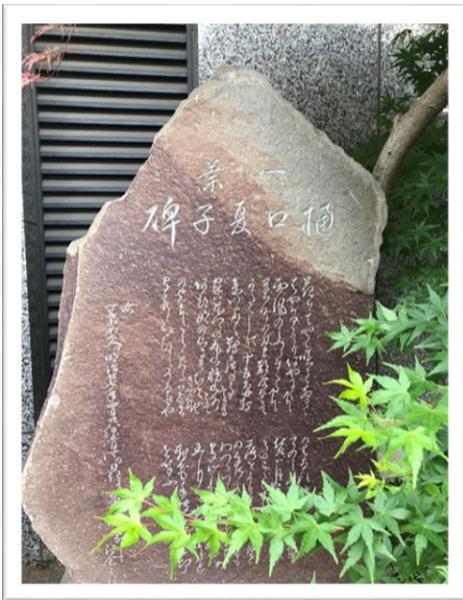
4・ 終焉の地

明治27年5月、本郷丸山福山町の「守喜」という鰻屋の離れ、六畳二間、四畳半の三部屋、庭には三坪ほどの瓢箪池があり、家賃3円といわれる平屋の家を借りて、この地で女3人暮らしがまた始まりました。

『にがりえ』の菊井のモデルは、住んでいた家の両隣の銘酒屋「浦島」と「鈴木亭」と言われています。

ここで「奇跡の14か月」と呼ばれる間に、たけくらべ、にがりえ等の名作・秀作を次々に書きあげていきました。原稿は千蔭流の書道を生かした筆書きで、なかなかの達筆です。

そして間もなく、病床にふすこととなり、わずか24歳で短い生涯を終えます。



左の碑は日記の本文で
一葉さんの直筆です。

現在の終焉の地周辺



すぐ前のこの通りは白山通りです。昔は何があったのでしょうか？

答えは・・・小さな発見をしながら、ガイドと歩いた時に。

是非一緒に出来るのを楽しみにしています！ [ガイドツアーのお申し込みはこちら](#)

(構成 文 写真 文京区観光ガイド)